

学部長を務められた先生方による 在任時のコミュニティ福祉学部の様子

福山 清蔵 先生

(コミュニティ福祉学部3代目学部長)



■ コミュニティ福祉学部設置に至る経緯

皆さんこんにちは。今日は最初にコミュニティ福祉学部設置に至る経緯をお話しします。

私と初代学部長であった関先生の2人で新しく学部を作る準備がはじまったところからお話ししてみます。

最初の段階は「新学部設置準備室」という場所が設置されます。初めは学部の名前がついていませんでした「新しい学部」ということしか決まっていなかったので、まず、最初に取り沙汰されたのは学部の名称でした。当時は「コミュニティ政策学部」という名前で、政策系と福祉系との複合的学部として想定されていました。

しかし、当時の文部科学省の「設置基準」では、原則的に新しい学部の増設は認められていませんでした。新しい学部が認められたのは看護学部、社会福祉学部、そして情報系の三つの学部計画だけでした。これはつまり、大学として構想していた政策系の学部では認可されないということです。そのような中、当時の総長であった塚田先生の下で、私たちは社会福祉系の新学部を立ち上げることにしたわけです。

立教大学ではすでに、社会学部社会学科の中で福祉教育に関することが40年以上にわたって担われていましたから、社会福祉に関するカリキュラムが学科の中に展開されていました。そして総長からは、「立教大学のこれまでの社会福祉をもっと発展させるような学部を作ってほしい」と言われました。

■ コミュニティ福祉学部という名称設定の経緯

当初は政策系の学部構想でしたので、学部名称を法学部と区別して「コミュニティ政策学部」とする案で文部科学省とも何度もやり取りをしています。その後社会福祉系でなければ認可されないということで福祉系の学部構想に移行しました。

次には準備室においてコミュニティ福祉学部という名称にするかどうか議論がございました。文科省での指摘では、「コミュニティ」と付く名前はいかがなものかと、コミュニティという名前について疑問が呈されていました。学部名を英語で言うと「カレッジオブコミュニティ」になるわけです。コミュニティカレッジというのはアメリカなどではその地域に根差した、非常に小さい学校、日本の短大規模の学校を指して使われているのです。それで、「歴史も伝統のある立教大学ともあろうものが」、という感じでした。「海外に行って説明するときにあなたたちが恥かきますよ」というのがその当時の言われ方でした。

一方、コミュニティ福祉学部という名称に関しては議論がありました。その頃の私はその案には反対でした。反対の根拠は、「コミュニティ」という概念が非常につかみにくいし分かりにくいし、特に高校生にはもっと分からなではないのかというのが、その当時の私の考えの中心でした。しかし、最終的に総長や大学のトップの人たちと激しく議論して、塚田総長が「よし、コミュニティ福祉学部」でいこうと最終の決断が下されました。

それから、足かけ3年ぐらいかけて他の先生方と一緒に学部を作ることになりましたが、だんだんコミュニティっていいかもしれないというふうには、私の中では後から少しずつ思い始めていました。というのは、それまでの福祉系の学部というのは、「社会福祉学部」という名前がほとんどです。

そして、今までの社会福祉学部における学問の中心は、国の制度・政策としての社会福祉です。つまり、高齢者福祉とか児童福祉、しょうがい者福祉などという国の福祉政策が中心にありました。そしてそれを担う人材養成、政策を研究するというのが教育の中心になっています。これからは「コミュニティが築く福祉」という発想をしなければいけない。そして制度・政策としての福祉だけではなく福祉の活動分野も、たくさん世の中にあるということがおぼろげながら見えてきました。

私は臨床心理学の立場ですから、福祉の学部構想を描くときの理念として、人間の存在をその根底まできちんと捉えることができるような学部教育を創り上げていきたいと思っていました。

簡単に言いますと、せっかく立教大学に福祉の学部を作るのでしたら、政策や法律ではなく人間を真ん中に置こうと考えました。人間を真ん中に置いて、他者の苦悩を共有し共感するという理念を抜きにして福祉は語れないと考えていまし

た。だから宗教学や心理学もそこに当然含まれるはずだというのが、その当時の私の拙い思いだったのです。

■ 開設当時のコミュニティ福祉学部

1997年の秋に認可されて1998年から開設となりました。当時は、「コミュニティ福祉学科」の1学科で定員が190名という定員です。立教大学に作る新学部は東京の六大学の初の福祉系の学部でもありました。そのことに誇りと名誉を関していましたが、果たして何人の人たちが受験してくれるのか、合格したら入学してくれるのかということについて、私たちは全く経験も手掛かりもなかったのです。当時の立教大学の平均値で合格者を出してみようという、ぶっつけ本番の大胆なやり方でした。

さて、蓋を開けてみると、なんと定員をはるかに超えて300人を超える学生が入学の手続きをしたのです。予想より約100名ほど多くの学生が入学することになりました。

その中に本日シンポジストとして参加している松森大さんも居たわけです。言語教育は1年からの必修で4月からすぐに始まりますが予定よりも100名も増えたので、全カリの言語クラスを急きょ幾つも新規に作らなければいけないことになって大騒ぎでした。学部が立ち上がって、運営は泥縄で大変でしたが、多くの学生が入学してくれたことで、私たち教員は大いに喜びました。

コミ福には1998年の4月にはほとんどの教員が着任していました。しかし、専門科目としては基礎演習を中心に、あと2つか3つぐらいしか一年生が受講できる専門科目はなかったのです。1年生に配置されている専門科目というのは数科目です。それで、いかにもコミ福らしいと思うのですが、専門の教員はもとより言語の先生もスポーツの先生も、先生たちには随分と時間的余裕がありました。それで、全員で基礎演習を担当しようと言い始めまして「基礎演習」を教員2人体制で配置することになりました。ともかく授業時間になると外にはぶらぶらしている学生が一人も居ないという不思議なキャンパスで学部教育が始まりました。

■ 一般教育部の解体とコミュニティ福祉学部の教育

専門教育は福祉と心理と宗教、この3つを柱にしてカリキュラムを構成しようという構想でした。

それまで大学教育は一般教育部という教養のグループと、学部の専門教育の二つに分かれていました。教員も2つの組織に分かれて運営されていました。一般教育部に所属する先生たちと、社会学部、文学部などといった専門学部に属する先生たちと教授会も分かれていました。学生は特定の学部に入りますが、最初

の二年間は主に一般教育科目を履修し、三年次から専門科目を履修するというのが一般的でした。その一般教育に関して責任を担っていたのが一般教育部という教授会組織です。

それが一般教育部を廃止し全科共通カリキュラムと形で大学全体で教養教育について取り組むという大改革の中で、コミュニティ福祉学部が出発したわけです。

その流れで、一般教育部に所属していた教員たちは他の専門学部に全員振り分けられることになりました。当時一般教育を担当していたキリスト教関係の先生たちがキリスト教学科とは別に一般教育にも何人もおられました。コミュニティ福祉学部に来られた先生の中に、鈴木先生、月本先生、佐藤研先生などがおりました。関先生はキリスト教学科から移籍しています。私は文学部からの移籍です。

その後、10年以上後になって大学にキリスト教学研究科というのできることにになり、月本先生と佐藤研先生はそちらに再度移籍するということになりました。簡単に言えばその時代時代の大学の政策に翻弄されてきたというふうなことが正直なところです。

私と関先生の間では、人間を中心に置いて捉える福祉学を追求するというコンセプトを明確に表現したいと考え、立教大学の中で初めて「学部の教育理念のスローガン」を掲げました。最初に付けられたのが『人間の尊厳のために』という学部教育の理念です。その後教授会でいろいろ議論があって、現在使用されている『いのちの尊厳のために』に変更されました。

■ 学部長時代のこと

次に私が学部長になった当時のことを少しだけ振り返りたいと思います。教育を実際に運営してみると色々支障が出てきていました。そこで学部では2005年頃から福祉実習教育を充実させる体制を明確にしようと考えてきました。社会福祉学の先生たちを中心として「福祉学科」が構想されました。そして、福祉学以外の先生たちを一つのグループにして「コミュニティ政策学科」を作りましたので、政策学科の中に社会学、政策学、宗教学、心理学の先生がいたわけです。

コミュニティ福祉学部の設置から数年が経過してよいよ大学院を作るという頃に、新座キャンパスに現代心理学部でできることになりました。その流れの中で、コミ福にいた臨床心理学の教員3人のうちの2人（林先生、箕口先生）が現代心理学部に移籍することになりました。ともかく福祉学部に心理学を生かしたいと願って私は残っていたのですが、現代心理学ができたために、より学部における心理学の位置づけと方針をはっきりしなければならなくなってきたと思います。

私が学部長だったのは、2006年、2007年ですが、2007年に今度は学部内にスポーツウエルネス学科を立ち上げるための準備室ができました。

毎週のように新学科準備室の会議が開催されました。先ほどは言いそびれまし

たが、一般教育部の解体に伴ってスポーツ系の先生たちが全員コミュニティ福祉学部にも所属していました。しかし、コミュニティ福祉学部の中にはいわゆるスポーツやスポーツウエルネスに関する科目は制約があってそうたくさんは置けませんでした。

しかし、スポーツを専門とされる先生たちがより専門的な力を発揮するために、学部教育として体系的に位置付けたほうがよいという方針が打ち出され、スポーツウエルネス学科の構想が持ち上がり、2008年からウエルネス学科が誕生するということになりました。

スポーツ系の先生たちの中では、身体という側面から見ると、現代心理学の映像身体学科という学科があり、そちらに所属するのもいいのではないかという議論もありました。しかし一方で、ここまでコミュニティ福祉学部の先生たち学生たちと一緒にやってきたのだから、コミ福の中で障害者スポーツを含めた新しいスポーツ系の学科を作っていこうという声が大きかったのです。このような経過を経て今に至る3学科体制というのということになりました。

以上、私からコミュニティ福祉学部創設にいたる経緯そして私が学部長として在任した当時の様子についてお話させていただきました。時間の都合もあるでしょうから、私からの話はこのあたりでよろしいでしょうか。ご清聴ありがとうございました。



■ スポーツウエルネス学科創設の経緯

皆さんこんにちは。こういう貴重な機会をいただきありがとうございます。

先ほど福山先生より学部の発足から3学科になるまでの経緯についてお話がりましたが、2学科から3学科に変わった経緯について少し補足させていただきたいと思います。2006年には大橋先生が総長になられたということもあり、その流れの中で新しいスポーツ系の学科を作るということが一気に加速したという背景がありました。しかし、スポーツ系の学科を作る際、健康という言葉をどのように位置付けようかということが議論になりました。

この健康という言葉には限界があるということがその際、議論でありました。例えば、WHOは、健康を規定する場合に、身体的な、精神的な、あるいは社会的に良好な状態だと言ってしまふわけです。そうするとヘレン・ケラーは健康に入らなくなる。しかし、それはちょっとおかしいですね。つまり、生き方としての健康つまり、今の状態を自分なりにしっかり受け止めて、それをより健康的で生きがいを持って生きていくという総合的な健康観に基づくものでなければならないという議論になりました。それがウエルネスという言葉なのです。つまり、コミュニティ福祉学部の中にスポーツ系の学科を作るのであれば、「状態としての健康」ではなく、ウエルネスという生きがい感を含めた総合的な健康観を中心に据えるべきだということになったのです。こうして、ウエルネスという言葉が入ったスポーツウエルネス学科が設立されることになりました。

■ 3学科体制になってからのコミュニティ福祉学部の様子

3学科になりまして、コミュニティ福祉学部も大きくなってきました。久しぶりに会う方も多くいらっしゃいますので、コミュニティ福祉学部をめぐる環境や状況、そして今、学部が取り組んでいることについて報告したいと思います。

2008年にスポーツウエルネス学科ができて3学科体制となり、学生数は1,722名(2013年5月現在)になりました。現在、立教大学には全体で約2万人の学生がおりまして、池袋に約15,000人、そして新座に約5,000人となっています。10学部の中なかでも大きな学部の仲間入りをしているというのがコミュニティ福祉学部の状況です。その中であって大学が有する施設環境もだいぶ変わりました。

でも変わらないのは学部共通の教育思想です。基本は、福山先生のお話にもありました「命の尊厳のために」という理念のもとに、一人ひとりの学生が問題意識を持って現場で学ぶという精神は変わりません。

また3つの学科になったことで新しい福祉のあり方を支える土台がしっかりしてきました。ごく簡単にいけば福祉学科がハンディキャップをお持ちの人の支援、援助のあり方や方法について学び、スポーツウエルネスは、全ての人がいかに健康的に、より豊かに生きるための考え方や方法を学ぶ。さらにそしてコミュニティ政策学科は、それらを可能にするコミュニティのあり方とその方法について学んでいく。この3学科によって新しい福祉社会の構築を目指すことが可能になったのです。

このように理念のうえでは3学科のバランスが取れていたのですが、私は今2010年から学部長を4年仰せつかっておりますけれども、2011年に創設時以来いらっしゃる先生方を調べてみるとわずか7名になっていました。つまりこれは全体の4分の1になっていることになります。さらに2006年よりいらっしゃる先生を足しても50パーセントでした。つまり、新しい先生方が多くなる中で、どうやって立教の建学の精神や学部の理念を受け継ぎつつ運営していくかというのは私に課せられた課題でした。

そこで今年でコミュニティ福祉学部は15年目を迎えることもあり、私は、ネクストステージに向けた基盤形成をしっかりやりたいと考えてこの4年間を過ごしてきました。そのなかであって「学生のために」を中心的な柱としてすべての制度、支援のあり方を見直しました。学生のためになるなら何でもやるということを徹底するための学部づくりをやってきました。そして自分で考えて動ける学生さんの学びを支援したいと思っています。

■ コミュニティ福祉学部における学生のキャリア支援の特徴と学びの支援

立教は139年の歴史を持つ大学ですが、その中でコミュニティ福祉学部はまだ15年目を迎えた新しい学部の一つです。そのなかであって前述のように「学生のために」を中心として、「存在感がある学部」、「発信する学部」を目指してこれまで運営を行ってきました。

そして、研究と教育の推進の枠をきちっと作ろうということで研究推進では研究所を創設しました。研究所は今、独自の動きを始めたところです。教育の推進

においては、学部で「入る」そして「育つ」、最後に「出る」というところまでしっかり学生を育てようということで運営を行ってきました。

その中で、大切にしたのはゼミ形式の授業です。皆さんのときはいかがだったでしょうか。おそらくみなさん同じだと思いますけれども、コミ福の教育は、少人数でしっかりとゼミナールを中心にしながら進めていく、実習教育をしながら研究を手掛けていきながら学びを続けていくということをベースにしているわけです。そこで3学科になってどんな卒業生が出ているのでしょうか。ここで、少しキャリアについて少し見てみたいと思います。

就職先について、どんな所に特徴があるか、サービス業や福祉関係の職種が多いのは予想通りですが、公務員が全学部のなかで最も高い割合となっており、法学部より高いという状況になっています。そして、不動産関係が多く、全学部のなかで第2位です。

この点について、コミュニティ福祉学部で学ぶと福祉関係の職種に就職するイメージが強いかもしれませんが、全ての人が豊かに生きるにはどうしたらいいだろうというのを考えるのがコミュニティ福祉学という学問ですので、その中あって、皆が豊かに暮らせるまちづくりをしたいという思いが不動産業に向かわせているのではないかと考えられます。

次に学科ごとの特徴を見ます。福祉学科はサービス業が、コミュニティ政策学科では公務員が最も多くなっています。スポーツウエルネス学科は、卸売、小売、製造業、そして教育など多様です。ですから、福祉を学んだら福祉の方面へとか、そういうような話ではなくて、非常に広がりを持ってさまざまな角度から学びをしながら全ての人によりよくいくにはどうしたらいいだろうと学生は考えているのだと推察します。例えば、製造業でも、ベッドだとか本当に高齢者の人たちが気持ち良く眠れるベッドはどう考えればいだろうとか、コミ福の学びを生かして、多様な領域にその学びを応用しながら就職しているという状況が見えてきます。

その学びを支えるキャリア教育をキャリア発達という視点で捉えています。つまり、就職が決まればよいということではなく、4年間の学びを通して自分の人生選択ができる力をつけることが大切だと考えています。

キャリア発達の視点の教育ということについて少しお話しますと、1年生のカリキュラムとして各学科に対応した「キャリア形成論」という科目を新たに作りました。そこで自分と社会との関わりに気づいて2年生、3年生でフィールドに出掛けます。そして自分なりの課題意識を持つ力を養うことで初めて就職について考えることができるのではないかと意図しています。

また、インターンシップも力を入れています。授業として展開しているのがコミ福の特徴です。通年のコマとしてゼミ形式で実施しています。

今年から2学科に加え、福祉学科でも実習教育に加えて、インターンシップも充実させる方向で動いています。先週と今週、2週に分けて受け入れ先の皆様にもお越しいただいて報告会を実施しています。そして4年生が3年生を教えるという学部独自の就職に関する交流会も始めました。できれば先輩諸君におかれましては時々出張に来ていただいで、後輩諸君にさまざまお話をいただく機会があるといいなと思っています。

今年取り組んでいることは、公務員に特化した学部独自のキャリア教育や講習会の実施など学部プロジェクトとして企画し、実施し始めました。その他、学部内にキャリア支援室を創設し、キャリアサポーターを導入し、さまざまな取り組みを始めたところです。

さらに、語学についても力を入れ、リッチー先生を中心に英語で学ぶ福祉の科目群を創設しました。海外インターンシップについても、米国、英国に加えニュージーランドでのインターンシップを構想しており、広がってきたところです。

こういう形でコミュニティ福祉学部における学びの支援に真剣に取り組んでいます。

■ コミュニティ福祉学部における新しい活動と学部の支援

東日本大震災復興支援につきましては、立教の全学の中で本学部が最も早く取り組み始めました。大震災の発生から2013年10月1日で約2年半になりますが、本学部学生を中心としてのべ1,372名が、4地区で長期的な支援に立って現在もさまざまな活動を行なっておりますし、学生ボランティアとして521名が登録し、継続的な支援を実施してくれています。

1つの事例を紹介しますと、震災が起こったということが、風化しつつある昨今の社会情勢の中で、復興支援室の学生団体スリーエスが中心となって、学生諸君にまず見て感じてもらうところから始めようと企画し、大学から支援金をもらって学生が学生を支援する形で取り組んでいます。今こうした震災関連の学生の活動支援に予算的には大学からの支援、外部資金を含め、全体として年間約3,000万の規模で実施しています。

また、学生を褒めて育てる仕組みを作りましょうということで、学部長表彰制度を作りました。去年は10名と団体3団体に出しています。それ以外に学生さんの主体的な学びができるようにということで研究助成も始めました。また、本学部の学部生・大学院生であった坂本政明さん（故人）が寄付してくださった資金で留学生を支援する奨学金が今年からスタートしました。

それから、学生の学びを支援するアカデミックアドバイザー制度をしっかりとやろうと思っています。学生一人ひとりに教員がアドバイザーとしてサポートする仕組みです。例えば、今5年生以上でコミュニティ福祉学部に在籍している人は、

希望留年を除いて、約30人ほどです。学部には8年まで在籍できますので、在籍したい方は、それでよいのですが、卒業したい人については、これまで以上にしっかり支えようという動きも今始めているところです。

それからコミュニティ福祉学部の発展のために書籍も作ってきました。まず2009年に福山先生と尾崎先生（故人）を中心に福祉教育をまとめた『生のリアリティと福祉教育』という書籍を刊行しました。そして2013年4月、『新・コミュニティ福祉学入門』を刊行しました。現在『コミュニティ政策学入門』を作成中で、2014年3月に出版予定です。このような形で書籍をたくさん出版してきています。また、現代心理学の佐藤先生に作っていただいたコミュニティ福祉学部のDVDが完成しました。15分と30分ものがありますので是非ご覧ください。

これからも「学生のために」さまざまな取り組みを行なっていきたいと考えています。

以上、3学科体制になった経緯とその後の取り組みについて紹介させていただきました。ご清聴ありがとうございました。